



# 館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 2 月 6 日 (木)

発行 館長 加藤 智 一

## 山形市 印役と山家、双月そして大野目



2025 年 2 月 3 日 (月) の山形新聞、「連綿と 41 やまがた旧家・名家探訪」において「印役」と「山家」に与えられた麴製造の独占権について触れられておりましたので、少しだけ深掘りさせていただきます。事の発端は江戸時代の始め (1623 年)、馬見ヶ崎川が大洪水をおこしました。当時、馬見ヶ崎川の流れはとても急で、何度も洪水をおこしていましたが、この時は、町

中が水びたしになり、山形城のお堀も壊れてしまいました。これを見かねた当時の山形藩主鳥居忠政が、翌年の 1624 年から、洪水から町やお城を守るため、馬見ヶ崎川の流れを町から遠ざける大工事にかけました。工事は、盃山の一部を切り開き、現在の松原浄水場付近に堤防をつくり、現在と同じような流れに変えるというもので、それにあわせて馬見ヶ崎川に 5ヶ所の取水口を設けたことが、「山形五堰」の始まりとされています。

「山形五堰」の整備によって、農業用水 (水田や畑) の確保だけでなく、生活用水 (洗濯や洗い物) にも利用されましたし、鯉や鰻といった淡水魚を扱う料理店もでき、染物や紙すきも盛んになりました。しかし一方で、この大工事のために土地を提供した鈴川地区の村々 (印役、山家、双月、大野目など) は、元々馬見ヶ崎川による豊富な水源を使用した田畑や、農地が広がっていたとされており、この工事の影響により水脈が変わり、田畑が衰退してしまいました。そこで、当時、山形を治めていた大名、鳥居忠政は、印役、山家に「麴製造」、大野目は「和

傘」、双月は「紙すき」の独占権を与えたのだと言われています。今でも、山寺街道近辺には麴、味噌、醤油、酒、酢といった醸造に係る製造所が数多く存在しています。全てが江戸時代から操業しているわけではないのですが、「長谷川の山形仕込味噌」「鹿納長十郎味噌麴製造所」「原田こうじ味噌」「カネチュウみそ深瀬善兵衛商店 (1841～)」「大場味噌麴製造店」「フジ味噌醤油 (株)」「ヤンベ太田米酢造場 (1862～)」「(有)秀鳳酒造場」「鹿野久太郎味噌麴製造所」等が現在創業を続けておられます。

ところで、この馬見ヶ崎川の大工事を成した、鳥居忠政とはいかなる人物だったのでしょうか。鳥居忠政 (1566 年～1628 年) は、江戸時代初期の譜代大名で、徳川家康に仕えた父・鳥居元忠の後を継いで徳川家の重要な家臣となりました。小牧・長久手の戦いや関ヶ原の戦いで活躍し、大坂の陣では江戸城の留守居役を務めました。家康からの信頼も厚く、1600 年に下総矢作藩の藩主に任じられ、その後、1602 年に磐城平藩 10 万石、1622 年には、最上氏が改易された後を受けて出羽山形 22 万石に加増移封され、妹婿で新庄藩主・戸沢政盛、娘婿で鶴岡藩主・酒井忠勝、従弟で上山藩主・松平重忠らと共に、譜代大名として伊達政宗などの東北諸大名の監視を命じられました。そして、寛永 5 年 (1628 年) 9 月 5 日、山形で死去しています。享年 63 歳。



全く比較にもならない話ではありますが、私も今年 63 歳をむかえ、ふと人生を振り返れば、恥ずかしながら、足跡らしいものは皆無。江戸時代、確かに日本の平均寿命は、32 歳から 44 歳とされていますが、忠政が亡くなった歳になり思う事は、これからの人生「やり残した感」だけはないように、「やれることから全力で」、「怪我しない程度に猛進する」事かな? と思っております。誰かのためというよりも、巡り巡って自分のために。